

第3回 SPARC Japan セミナー2017

「オープンサイエンスを超えて」

趣旨説明

蔵川 圭

(国立情報学研究所)



蔵川 圭

<http://researchmap.jp/kurakawa/>



今回のセミナーは、「オープンサイエンスを超えて」と題して企画しました。今、学術情報流通の世界では、オープンアクセスからオープンサイエンスへと主要なスローガンがシフトしてきています。SPARC Japan セミナーにおいても、私が企画に関わりはじめた3年前から、研究データ共有、オープンサイエンスについて採り上げ、今回でシリーズ6企画目となります。

本日の課題

シリーズを通して、さまざまな関係者にご登壇いただき、研究データ共有、オープンサイエンスに関わる活動について学びました。そして、なぜ今オープンサイエンスという言葉が声高に叫ばれているのか、オープンサイエンスという概念は一体何で、どこから生まれ、どのように波及して、結果としてわれわれの仕事の問題意識の中に浮かび上がってきているのか。また、高度にデジタル化されつつある学術コミュニケーションの関係はどうであるのか、知識生産の方法は革新的に変化しているのか、本日はこれらの疑問を解き明かしたいと考えています。オープンサイエンスという概

念の起源と、現代の学術情報流通における先進的な取り組みについて、世界で活躍する一流の講師陣をお招きしてご講演いただき、今日一日皆さまと共に考えてみます。

学術コミュニケーション形態の変化の中で

過去を振り返ると、2002年のブダペスト・オープンアクセス・イニシアチブの宣言と、2013年のG8オープンデータ憲章の制定という二つの出来事は、科学アカデミーからのボトムアップな自主活動とトップダウンの政策提言という互いに交錯しつつも共通の方向を目指したオープンサイエンスの実現を加速する展開点となりました。この方向がわれわれの社会を取り巻く、いわゆるデジタル化の動向と同じであるとしても、人類がこれまで営んできた科学という活動の本来のあり方をついに実現しようというものであるのか、それともデジタル化といういわば道具の変化が科学活動の本質を変えようというものであるのかという見極めまではついていません。

確かにデジタル化とともに学術コミュニケーション

の形態は大きく変化して、研究室、教室、図書館における知識の生産と伝達の様式は予測不可能なほどに変貌しつつあります。このような変化の中で、学術知識の生産に従事するわれわれの日々の活動の方向性を見いだすために、今日一日だけでも立ち止まって、科学と学術の本来の姿にさかのぼり、現代の知識生産のあり方とその環境について議論してみたいと思います。皆さま方の仕事に必ずやお役に立てると確信しています。

本セミナーは、科学技術・学術政策研究所の林和弘さん、室蘭工業大学附属図書館の梶原茂寿さん、横浜国立大学大学院の深貝先生と共に企画いたしました。本日は一日どうぞよろしくお願い申し上げます。